喫茶店のマスターは情報屋

ムーンテイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
喫茶店のマスターは情報屋

【Ｎコード】
Ｎ３６００Ｘ

【作者名】
ムーンテイル

【あらすじ】
客の秘密とひきかえに情報を売る喫茶店の情報屋。
美しい女マスターが与える情報は幸を呼ぶか不幸を呼ぶか。
それはお客様次第――

※この物語はフィクションです。

第一話　喫茶店の噂

マンションの一室。薄暗く広い部屋。
複数の男女が集まり、禁断の宴をしていた。
なぜ禁断なのかは、部屋中に充満する煙と彼らが手にしている白い粉や注射器を見れば一目瞭然だろう。
すでに甘い夢を見て、ケラケラ笑っている者までいる。
だが、禁断の宴は、突如勢いよく開かれたドアの音にて幕を閉じた。
「動くな！　警察だ！　薬物取締法違反の罪で逮捕する！」

――――――

それから数日後。
先の薬物事件を摘発した戸田孝一刑事が、警視庁の休憩所で缶コーヒーを飲んで一服していた。
そこへ、疲れた様子の石山鉄也警部が来た。
「あ、石山警部。お疲れ様です」
「ああ、戸田か。聞いたぞ。手柄を立てたそうじゃないか」

「ええ、まあ…」

石山は自販機で緑茶を買い、戸田の隣に座った。

「またクズ共が減ってくれてせいせいするな。私の担当してる事件のクズも早く捕まえないとな…」

「連続ホームレス暴行事件ですね。目撃者の証言じゃ、なんでも十代くらいの少年達だとか…。しかも、メットとか覆面とかで顔隠して」

「そうなんだよ。いつも警察が駆け付ける前には逃げてしまう。クズのくせにそういう勘は働くみたいでな」

「…なんで、今の子供達って人を平気で傷つけられるんスかね…」

「クズの気持ちなんぞ知るか。それに引き換え、うちの息子は立派だぞ。私に反抗した事もなく、あの名門校の聖グレイアール学園に特待生として入り…」

「登君（のぼる）でしたっけ。すごいですよね。国立大学への進学率も国内有数なんでしょう」

「そうなんだよ。トンビが鷹を生むとはよく言ったもんだが、私の自慢の息子で…」

しつこいほど息子自慢をする石山の話を、戸田は相槌を打ちながら聞いていた。

疲れた時には何かと家族の自慢をするのが石山のストレス発散方法

なのだとわかっているからだ。

ピリリリ…

その時、石山の携帯電話が鳴ったので、石山はそれに出た。

「はい、警視庁の石山です。……何っ！？　またか！　現場は！？
……わかった！　すぐ行く！」

通話を切って走り出す。

「戸田も来い！　またホームレスが襲われた！」

「はい！」

――――――

捜査の結果、例の連続襲撃事件と同じ少年グループの犯行の可能性が高まった。

被害者のホームレスの男性は意識不明の重体。

一件目、二件目と続き三件目となったこの事件は、以前に比べてひどくなっていた。

「クソッ！　このままじゃ次は死人が出るかもしれん…！　クズ共が…！」

捜査本部で一人、ブツブツと言いながら頭を抱える石山。
その姿を見た戸田は、少し考えた後、石山に話しかけた。
「警部…」
「はっ…！　な、何だ？」
「…実は、僕がこの間押さえた薬物のパーティーの件…俺の手柄じゃないんです」
「は？」
「鵜羽（うば）駅の近くのシークレットっていう喫茶店で…」

――――――

戸田から聞いた説明通りに行くと、確かに喫茶店はあった。
閉店時間は過ぎ、ドアの窓ガラスごしに見える中は、明かりを抑えている様だった。
石山がドアノブに手をかけると、何の抵抗もなくドアは開いた。
カランカランとベルが鳴り、カウンターの女マスターが挨拶する。
「いらっしゃいませ」

石山はカウンターに近づき、懐から警察手帳を取り出して見せた。
「警視庁の石山と申します。ちょっとよろしいですか？」「はい。何のご用でしょうか？」
「…『蜜』を、いただけますか？」
戸田から教わった合言葉を口にする。
蜜を注文すると情報をくれるという情報屋。
ただし、そのかわりに客は自分の秘密を明かさなければならないという。
「どの様な『蜜』をご希望でしょう？」
「最近、大寺林市（だいじりん）で起きている連続ホームレス襲撃事件の事で、何かご存知ですか？」
「かしこまりました。当店のシステムとして、報酬は前払いとなっております」
「…やっぱり何か知ってるんだな」
下手に出ていた石山は眉間にシワを寄せた。
「気に入らん！　何が蜜だ！　事件に関係する情報を持っていたら、すぐに警察に提供するのが善良な一般人の義務だろう！」

泣く子もだまる石山の剣幕にさえ、マスターは不気味な程冷静だった。

「私が知っている事が事件に関係するかどうかはわかりません。ただの噂がほとんどですから」

石山はチッと舌打ちをした。

そういえば戸田も言っていた。

情報屋から聞いたのは『街中で若い男または女が異性をナンパしてどこかに連れ込んでいるらしい』という噂のみだったと。

そこからは戸田が独自に調べて、あの薬物パーティーの事件に行き着いたのだ。

マスターとの金のやり取りもない。

つまり、マスターは表向き、『戸田と噂話をした』だけに過ぎないのだ。

犯罪とは無関係。

だが、何やらうまくいきすぎている様な気がして、石山は気に入らなかった。

「いかがいたしますか？　お気に召さないのであれば、このままお帰りになってもかまいません」

「…待て。知ってる事があれば話せ。噂でもかまわん」
気に入らないが、ここで引き下がれば捜査は行き詰まるだけだ。
石山はマスターを見据えた。
「それでは、報酬をいただきます」
「…いいだろう。俺の秘密はな、『俺が今ここにいる事』だ」
「…ああ、そういう事ですか」
マスターはつまらなそうにため息をついた。
警察が得体の知れない情報屋を頼っている。
これだけでも立派な秘密なのだ。
これが世間に知られれば、警察の面目丸つぶれである。
石山はしてやったりな顔をした。
「報酬をお支払いいただくお客様にはドリンクをサービスする事になっていますが、そのお時間もなさそうですね」
「そんな暇はない。早く話せ」
「…鵜羽駅の四番出口付近のコインロッカーが、いつも使用中になっているそうです」
「何だと？」

「元々人通りも少ない所ですし、監視カメラもありません。見られて困る物をしまうのにはちょうどいい場所かもしれませんね」
そう言ってニコリと笑うマスター。
「わかった。調べてみる」
「あ、石山様」
出入り口に向かおうとした石山をマスターが呼び止めた。
「なんだ？」
「これは私の勘でございますが…石山様はこの事件には関わりにならない方がよろしいかと」
「ふざけるな！　公務執行妨害罪で逮捕するぞ！　クズがっ！」
石山はそう捨て台詞を吐くと、ドアを乱暴に開け閉めして出て行った。
ドアの上部についていたベルがカシャンと音を立てて落ちる。
マスターはそのベルを拾い上げ、手の平に乗せて愛おしむ様に撫でた。
「困ったものですね。人の話も聞けないなんて」
そうつぶやきながら、ベルに新しい紐をつけ、元の場所に結びつけ

た。

―――――――

「何だ…これは…？」

鵜羽駅の四番出口付近のコインロッカーの前で、石山は愕然としていた。

四番出口自体わかりにくい所にあるせいか、あまり使われていないと言うコインロッカー。その中で唯一使用中のロッカーがあった。

係員に捜査したいと話し、特別にスペアキーで開けてもらうと、中からスクールバッグが出てきた。

その中身を開けると、出てきたのは学生服だった。しかもそれは、石山の息子登も在学している聖グレイアール学園のものだった。

「なんでこんな所に…ん？」

石山は制服の胸ポケットに何か入っている事に気づいた。中を探ると出てきたのは生徒手帳と…学生証だった。

その学生証を見て石山は更に目を見開いた。

（こ、これは登の！？　どういう事だ！？）

「刑事さん…？」

後ろから係員が声をかける。

「あっ、いえ！　どうやら、捜査とは関係なさそうで…！　ご協力ありがとうございました！」

鵜羽駅を後にした石山は、携帯電話を取り出して家にいるであろう妻にかけた。

トゥルルル…トゥルルル…ガチャ

『はい、石山です』

「私だ。急にすまない、母さん」

『まあ、どうしたの、あなた？』

「登はいるか？　もう学校も終わっている時間だろう」

『登は友達の家に行ってるわ。勉強会ですって』

「家に帰ってからか？」

『いいえ。学校から直接行くって』

「いつ頃帰る？」

『今日はそのまま泊まるって。食事は友達と一緒に外食するんですって。最近多いのよ、そういうの。みんな登に勉強教えてほしいん

ですって』

「そ、そうか…それで、誰の家に行くって？」

『あ、ごめんなさい。そこまでは聞いてないわ』

「わかった。別に大した用事じゃないんだ。それじゃ」

通話を切って、登の携帯電話にかけた。

トゥルルル…トゥルルル…トゥルルル…

電話の向こうのコール音が数秒流れた後、機械的な声のガイダンスが流れた。

どうやら電源を切っているらしい。

石山は、登の身に何かあったのではないかと思い始めた。

ただ友達の家に泊まるだけなら、わざわざ制服をコインロッカーに預ける必要はないはずだ。

ピリリリ…

手にしたままの携帯電話が鳴った。登かと思ったが、ディスプレイに出ていた名前は戸田だった。

「石山だ。どうした、戸田？」

『警部。ついさっき十代の少年が万引きで補導されたんですが…そ

の…』

「何？」

『詳しくは後で話します。すぐに本庁に戻ってきてください！』

「あ、ああ、わかった」

タクシーを呼んで警視庁に戻った。

――――――

石山が取調室に行くと、中学生くらいの少年が縮こまった様子で椅子に座っていた。

その向かいに座っていた戸田が石山を出迎える。

「あ、警部。お疲れ様です」

「こいつか、万引きやったとかいうクズは」

石山は汚いものを見るような目で少年を見た。

「いえ、それが…この少年は、万引きをしてこいと人に指示された様なんです」

「何だと？　おい！　誰に指示された！？」

石山の剣幕に少年はビクッと震え上がる。

「あ…その…登って…人に…」

「なっ…！？」

少年の口から出た名前を聞いた途端、石山は目を見開いた。

「俺…あいつらに絡まれて財布取られて…返してほしかったら、万引きやってこいって言われたんです…『もしバレても、俺のパパは警察の偉い人だから見逃してもらえる』って言われて…でも、俺が店の人に捕まった時には、誰もいなくて…」

「嘘つくなぁあああ！！」

少年につかみ掛からんとする石山を戸田が押さえる。

「警部！　落ち着いてください！　誰か！　誰か来てくれ！」

外にいた警察官が入ってきて、戸田に協力する。

羽交い締めにされながらも、石山は喚き散らした。

「嘘だ！　嘘だぁ！　登はそんなクズじゃない！　登は！　登は特待生だ！　優等生だ！　エリートだあぁ！　何かの間違いだあああぁ！」

――――――

その夜。石山登他数名の少年達が娯楽施設にいた所を警察官が補導した。

取り調べの結果、ホームレス襲撃事件も彼らの仕業である事がわかった。

動機は『汚くて臭いから消したかった』という身勝手きわまりないものだった。

さらに主犯格の石山登は、聖グレイアール学園へは裏口入学で入った事も判明した。

母親がかわいい息子の為に密かに手を回していたのだ。

母親は登を心底甘やかしていた為、登が友達の家に泊まると言ってもすぐに信じた。

登は駅のコインロッカーに覆面やTシャツ、ジーンズなどを隠し、学校が終わってからそれを出して近くのトイレで着替え、制服をコインロッカーに入れる。

そうして私服で街に繰り出し、ネットで知り合った仲間と共に夜遊びをしたり、隠し持っていた覆面をかぶって襲撃事件を起こしていたのだ。

そんな息子の凶行を知った時の石山と妻の荒れ様は凄まじかった。

警視庁に呼び出された妻は半狂乱で泣き叫び、石山はそんな妻に怒鳴り散らし、お互いに責任をなすりつけ合う修羅場。

誰も手出しができずにいると、警視の鶴の一声が響いた。
口喧嘩は止まり、妻はすすり泣く。
石山は唇をかみしめ、うつむいた。

――――――

それから一週間が過ぎようとしていた頃。
戸田は再び、喫茶店シークレットに来ていた。
今日は定休日ではあったが、それはマスターが情報屋となる時。
戸田は事件の全貌をマスターに話した。
「登は少年院行き。警部もその奥さんも離婚手続きを進めてます。息子の親権を押しつけ合ってモメてる様です。あれほど息子を自慢していたのに、今じゃ息子と面会すらしてません」
「そうですか。大変な事になっているみたいですね」
「何言ってんですか。マスターがそう仕組んだくせに。そうでしょう？」
「？　私は何もしてませんよ」

マスターはキョトンとした。

「マスターの噂は聞いてますよ。普段のここのマスターは初老の男性。だけどごくまれに、営業時間外で入り口の鍵が開いている時があって、その時に入れば女マスターがいる。それがあなたです。そして、その女マスターから情報を得た者は幸せになれる。実際、僕もあなたに情報をもらえて事件を解決させる事ができましたからね。でも、マスターを怒らせれば不幸になるそうですね」

「さぁ、どうでしょう。仮にその石山という方がここに来たとしても来なかったとしても、襲撃事件の犯人は変わりませんよ」

「…それもそうですね」

戸田はこれ以上追求するのはやめた。

最初に石山に情報屋の話をした時、石山は『くだらん』の一言で一蹴していた。

彼がここに来たという証拠もない。

代わりに、戸田はこう言った。

「また…『蜜』をくれますか？」

「どのような『蜜』をご希望でしょう？」

「今話した石山一家が少しでも和解する方法です。警部には色々と世話になりましたからね。少しは返さないと。報酬はそうですね…僕の刑事になって間もない頃の失敗談なんてどうです？」

「大変興味深い報酬ですね。でもわざわざ報酬を頂くほどの『蜜』ではございません。簡単ですよ。ご子息の話をご両親が聞いてあげればいいのです。ただ、お客様から話を聞いたところ、そのご両親は人の話を聞く事が大変苦手の様です。まずは品のない口を閉じる練習をさせる事をおすすめします」

ＥＮＤ

第二話　少女の依頼（前書き）

追い詰められた少女がすがったのは、殺し屋でした。

第二話　少女の依頼

雑居ビルの中の階段を上がり、喫茶店シークレットの入り口の前に立つ。

ドアには『本日定休日』と書かれたプレートが下がっていた。

萩山千春はゆっくりと、ドアノブに手をかけた。

カランカラン…

「いらっしゃいませ」

長い黒髪を後ろで丸めた美しい女マスターが、彼女を出迎えた。

千春は、カウンターにいるマスターの目の前に来てから言った。

「ここの事はネットの噂で聞きました。『蜜』をください」

「どの様な『蜜』をご希望でしょう？」

千春はそこで目を閉じて、一度深呼吸した。それから意を決した様に、マスターを見据えてこう言った。

「殺し屋を…紹介してください」

その瞬間、マスターは千春の目の前にナイフを突きつけた。

「キャッ…！」

千春は目をつぶって後ずさった。
つまずいて尻餅をつく。

「よくごらんください、お客様」

マスターの落ち着いた声がして、おそるおそる目を開けた。

ナイフだと思ったのは、ナイフの様な形に折った布だった。

マスターはそれをヒラリとはためかせて広げ、グラスを磨き始めた。

「殺し屋に関わりたいのなら、ご自分も殺される覚悟が必要です。覚悟がないのでしたら、お引き取りください」

マスターはそれきり黙って作業を続けた。カウンターの下にグラス棚があるらしく、一つずつグラスを出しては磨いている。

千春は立ち上がり、マスターに近づいた。

「もう、殺し屋にお願いするしかないんです！　そうじゃなきゃ、お母さんが殺される！」

マスターの動きが止まった。

グラスをしまい、マスターは千春を再び見た。

「何やら、事情がおありの様ですね。まずはお話をお聞きしましょう」

どうぞおかけくださいと、マスターに促されて千春はカウンター席に座る。

「私のお父さんが八年前に亡くなって…私とお母さんで生活してきたんです。

だけど、ある時お母さんは新しい人を好きになったんです。その人は井沼彰介と名乗りました。

その人は最初、一流企業に勤めているとか言って、お母さんに近づきました。お母さんも悩みを相談してもらったりして、助かったと話していました。

でも、優しかったのは最初だけでした。私が学校に行っている間に、お母さんがその人を家に初めて招いたんです。そうしたら…いきなり殴られて家のお金を取られてしまったんです」

それからというもの、井沼は萩山家に居座ってしまった。

千春と母親に暴行し、その様子をカメラに撮って、逃げたり警察に言ったら写真をばらまくと言って脅した。

母親がこれまで貯めた貯金も井沼が酒やギャンブルにつぎこみ、金がなくなったら母親を人質に千春に売春を強要した。

一流企業に勤めているというのも真っ赤な嘘。本当は職も家もない遊び人だったのだ。

「私の体も…もうボロボロなんです」

千春は制服の袖をまくった。
あらわになった腕には痛々しい青アザが広がっていた。
「これじゃあ体育の授業も出られないでしょう？　でも私、元から体が弱い方で、体育の授業に出た事もないから、休んでも誰も気に止めないんです。
今日も、学校へ行くふりをして、学校には体調不良で休むとこっそり連絡しておきました。そうしてここに来たんです」
「それで、その男を殺したいと思っているのですか？」
「本当は私が殺したいんです…でも、あの男は、常にお母さんを連れ回しているんです。だから、私も手出しができません」
マスターはそこまで聞くと、片手をあごの近くにやって思案する様な仕種を見せた。
千春は黙ってマスターが何か言うのを待つ。
やがて、マスターは口を開いた。
「…わかりました。私から殺し屋の方に連絡を取りましょう」
「本当ですか？」
生気のなかった千春の目が、少し輝いた。
「はい。そのかわり、あちらの方への報酬を支払う事になります。金額は…」

マスターの言った金額は大金ではあったが、千春は大丈夫ですと答えた。

「それでは、お客様の秘密を『報酬』としていただきます。飲み物も一杯サービスいたしますので、こちらのメニューよりお選びください」

マスターが示した先にあるメニューを見た。

「えっと…じゃあ…レモンティーをホットで」

「かしこまりました」

マスターがカウンターの奥へ行ってレモンティーを作る間、千春は自分のかばんの中を探った。目的のものを探し出すと、カウンターの上に置いた。

「お待たせしました。お客様、そちらは?」

マスターがレモンティーを持ってくると、それに気づいた。

千春が取り出したそれは、一枚の宝くじと新聞紙だった。

「売春の料金をごまかして、浮いたお金で買った宝くじです」

「それが、お客様の秘密なのですね」

「はい…これで当たらなかったら、自殺する覚悟を決めていました。今日が当選発表の日だったから、駅の売店で新聞を買ってトイレで確かめました。

そうしたら…一枚当たっていたんです」

千春の言った金額は、マスターの言った金額を上回っていた。

マスターは新聞にある当選番号と宝くじを見比べ、千春の見間違いではないと確認した。

「わかりました。それではこの宝くじの当選券と、私からの紹介状を同封してお送りいたします。最後に確認いたしますが、本当によろしいのですね」

「…はい。お願いします」

「ターゲットの写真などがあればご提示願います」

「あ、写真はありませんが…特徴なら言えます」

マスターはレジの近くの引き出しからメモ用紙と万年筆を取り出した。

「それでは、ターゲットの特徴や名前、それからお客様のお名前とご自宅の住所と電話番号をお教えください」

「え…？」

急にマスターが質問してきたので、千春は面食らった。

「私の事も言わなきゃダメですか…？」

「当然です。そうでなければ紹介状になりません。

何しろ殺し屋という裏の世界の人間と関わるのですから、そのくらいのリスクは背負っていただかなくては。
それに、ターゲットはお客様のご自宅にいるのでしょう？」

「あ…そうですね」
千春は答え、マスターはそれを聞きながらメモ用紙に万年筆で書いていく。

カウンターの裏で書いている為、何を書いているのかは千春には見えなかった。

やがてマスターは書き終えると、メモ用紙と宝くじの当選券を持って店の奥に消えた。

これでもう後戻りはできないと千春は思った。

なぜか奇妙な程落ち着いている自分が、正直怖い。

レモンティーに口をつけた。

「あ…美味しい」

ふと、父親が生きていた頃、家族三人でレストランへ行った事を思い出した。

（あの時飲んだ紅茶も美味しかった）

もう、楽しかったあの頃には戻れない。

自然と千春の目から涙がこぼれた。

―――――

喫茶店のカウンターの奥は倉庫になっており、上のフロアに続く階段がある。

マスターはそこを上がると、二つあるドアのうち右側を開けた。中世のアンティークで統一された落ち着いた雰囲気の部屋。

マスターの居住スペースである。

マスターは備え付けの棒で天窓を開けると、一羽の鳩が飛び込んできた。

「キャンディ、またお願いしますね。このメモを山桜様に届けてください」

マスターが呼び掛けて優雅に指を差し出すと、鳩はその指に止まってクルックーと鳴いた。

マスターは木製の机の側にキャンディと呼んだ鳩を下ろし、小さな金属製の筒に先程のメモを丸めて入れた。

それをキャンディの脚に取り付けると、窓を開けてキャンディを外へ放した。

「さてと…後は」

机の中から封筒と便せんと切手を取り出し、便せんに短い文を書いた。封筒に住所を書いて切手を貼り、その中に宝くじの当選券と便せんを入れてシールで封をする。

そして部屋の出入り口のドアを開けて、反対側のドアをノックした。中から出てきた初老の男に声をかける。

「オーナー。いきなりですみませんが、この手紙をポストに入れて来てください」

――――――

正午を過ぎた頃、キャンディはある屋敷の庭先に降り立った。

盆栽をいじっていた和服の老人がキャンディに近づくと、その脚に結ばれた筒に気づき、伝書鳩だとわかった。

筒からメモ用紙を取り出すと、そこには住所と電話番号とメッセージが書かれていた。

『公衆電話を使ってこちらの電話番号におかけして、『犬養彰介はいるか』とお聞きください。苗字は井沼と名乗っています。なお、このメモはご覧になった後、処分をお願いします』

それを読んだ老人はニヤリと笑った。

「やはりカタギの家に潜り込んでおったか。おいっ、誰かおらんか！　奴が見つかったぞ！」

家の中に入って人を呼び、メモにあった住所を張り込む様に伝えた。

――――――

萩山家のリビングの壁に、殴られた千春の母千景（ちかげ）の体がぶつかった。

「千春に売春やめさせろだぁ？　偉そうな口聞いてんじゃねぇよ！！」

井沼は千景の胸倉を掴み上げ、壁に背中をたたき付ける。

「うう…だから…私が代わりに稼ぎますから…」

「誰がてめぇみてーな使い古し買うかよ！　アレもヘタクソだし写真撮る為じゃなかったら俺だって抱きたかねぇよ！
俺はなぁ、住む所と金ヅルさえ手に入ればよかったんだ！
ちょっと優しくしてやっただけで本気になりやがって！　バカじゃねぇの！　年頃の娘がいるって言うから目ぇつけただけだよ！　ギャハハハハハ！」

何度もたたきつけられ、同時にまくし立てられる暴言の数々。

床にくずれ落ちる千景を踏み付ける。

「まあ、てめぇのスタイルだけは悪くないからなぁ。ネットでも評判いいぜ。まだ顔は出しちゃいないが、アザだらけの女の裸に興奮するマニアには大人気だよ」

千景はそれを聞いて目を見開いた。悔しさから唇を噛み締める。

「立て、コラ！　そろそろ千春も学校終わりだろ！　待ち合わせ場所に行くように伝えろ！　今度の客は気前がいいからそそうのない様にしろとも言っとけよ！」

「は…はい…」

フラフラと立ち上がり、固定電話に近づく。

その時、電話が鳴った。

千景は一度井沼へ振り返る。

「出ろよ。いいか、何事もなかったように振る舞えよ」

千景はうなずき、受話器を取った。

「はい、萩山です。……え、犬養彰介？」

その名前を聞いたとたん、井沼の表情が蒼白となった。

それから弾かれた様に部屋を飛び出し、外へ逃げていく。

それを見た千景はポカンとしたが、自分が通話中である事にハッと気づき、受話器に話しかけた。

「あ、いえ、そんな名前の方はご存じありませんが…え？」

通話はすでに切れていた。

――――――

千春が家に帰る頃には、井沼はいなくなっていた。

急に出て行ったというが、千春にとっては都合が悪かった。

井沼に逃げられては、殺し屋が殺せなくなるからだ。

しかし、その問題は翌日のニュースで解決した。

井沼もとい犬養の遺体が川で発見されたのだ。

上流の橋で彼の免許証が見つかり、酔っ払って橋から落ちた事故として見られた。

だが、千春は殺し屋がやったのだと思った。

ところがその翌日、手紙が届いた。

差出人の名前はなかったが、封筒に入っていた宝くじの当選券ですぐに誰かわかった。

そして同封されていた便せんにはこう書かれていた。

『必要なくなったのでお返しします』

（あの男は…私のせいで死んだんじゃなかったんだ）

自然と涙が流れた。

ここに来て、ようやく力が抜けた気がした。

ＥＮＤ

第三話　父親の推理（前書き）

娘はなぜベランダから落ちたのか――

悩み続ける父親の物語。

第三話　父親の推理

喫茶店シークレットはどこにでもある平凡な店だった。

初老の男がマスターとしてカウンターに立ち、客にメニューを振る舞う。

客は美味しいお茶やコーヒー、あるいは料理に舌鼓を打ち、憩いの一時を満喫する。

しかしそんな喫茶店シークレットには裏のマスターが存在する。

閉店の時にまれに鍵が開いている事がある。

運がよければ、中に入って女マスターに会う事ができる。

彼女に『蜜』を求めればいかなる情報も教えてくれるだろう。

ただしそれには条件がある。

先に自らの秘密を打ち明けなければならないのだ。

さて。

そんなシークレットの情報屋であるマスターの元に白沢伸治（しらさわのぶはる）が訪れたのは、ある日の夜の事だった。

「娘がなぜ落ちたのか…わからないんです。とてもしっかりした子で、危ないからベランダに一人で立つなという言いつけも守ってい

たのに…」

彼の持ってきた新聞の切り抜きには、『小2女子児童転落』という見出しの記事が載っている。

今日の明け方、大寺林市（だいじりんし）の市営団地の3階に暮らす信治の娘の雪音（ゆきね）が頭から血を流して地面に倒れているのを、散歩していた近所の住人が見つけて119番通報したのだ。

「今日の明け方、救急車のサイレンの音で目を覚まして…昨日確かに閉めたはずのベランダの窓が開いていたんです。そこから下を見たら…

ちょうど真下に人だかりができていて、救急隊員が雪音をストレッチャーに乗せようとしていました。

つい昨夜までいつも通りに子供部屋で寝ていたはずの雪音が…です。

病院で医者の先生から話を聞いた時はショックを受けました。

状況から見てうちのベランダから落ちたらしい雪音は、頭を強く打ったショックで昏睡状態。意識が戻る可能性が極めて低く、たとえ戻ったとしても後遺症が残るかもしれないと」

信治はそこまで一気に話して一息つく。

マスターは黙って話の続きを待つ。

「すみません…身内の事なのに、情報屋に相談するのも変ですよね。

でも他に相談できる相手もいなくて、家でじっとしていても嫌な事ばかり頭に浮かぶものですから…」

「身内といっても、必ずしもすべてがわかるわけではありません。一人で思い詰めるより、私のような者に相談しにいらしてくれて光栄ですわ」

マスターは優しい笑顔で言った。

「ですが、私は探偵ではなく情報屋です。情報屋の役目は情報を与える事のみなので、それを手がかりに推理はお客様が行ってください」

「はい。報酬は…秘密を話せばいいんですよね」

「その通りです。いただいた報酬は厳守いたしますのでご安心を。報酬をお支払いいただくお客様にはドリンクを一杯サービスさせていただきます。こちらのメニューよりお選びください」

信治はあまりマスターの手をわずらわせたくないと思い、カルピスを頼んだ。

マスターはグラスを取り出し、氷を入れてカルピスを注いだ。

「お待たせしました。ストローはこちらからお取りください」

信治はストローを使ってカルピスを一口飲んだ。

「カルピスなんて子供の頃以来だから…なんだか懐かしいです」

少し笑顔が戻った彼を見て、マスターも微笑んだ。

「話せば長くなるんですが…

私は１０代の頃、できのいい兄や姉達と比べられるのが大嫌いでした。

一人で生きてやるといきがって、父親とケンカして勘当を受けて家を出て行きました。

兄弟の末っ子で何の取り柄もなかったし、連れ戻される事もありません。

自由になったと思い込んで、何のあてもなく適当に、住み処(すみか)や職を転々としながら生きてきたんです。

そして２５の時に出逢ったホステスの方と入籍して、雪音が生まれました。

私にもようやく責任感が生まれ、工務店に就職して、今の団地に引っ越して家族三人で細々と暮らしました。

ところが…雪音が４歳の時、妻が育児に疲れたと書き置きと離婚届けを残して出て行ってしまったんです。

私はそんな妻に嫌気がさして捜そうともしませんでした。

一人で雪音を育ててやる。どんなに大変でも絶対見捨てないと誓ったのです。

幸い雪音は屈託(くったく)なく育ち、しっかり者で元気な明るい子になりました。

学校では友達も多く、特に二年生になってから魚岸姫子（うおぎしひめこ）という名前の転校生と親友になりました」

「魚岸勇助外交官のご息女（そくじょ）ですね」

「あ…ご存じでしたか」

「情報屋ですので」

「ええ、そうなんです。私もこの間授業参観で挨拶した事がありますが、本当に見ただけでいいところのお嬢様だとわかるような子でした。ブランドのオシャレな服を着ていて、礼儀正しく誰からも好印象を持たれる様な子でした。

ところが…」

信治は『ここから私の秘密となる話です』と付け加え、昨日の出来事を話した。

〜〜〜〜〜

その日は有給休暇を取っていた信治の家に、突然魚岸姫子の母親が訪ねてきた。

リビングに上がってもらい、お茶を出すと、彼女はお願いがあって来ましたと言った。

「今後一切、おたくの娘さんをうちの姫子に近づけさせないでいただきたいんです」

「え…？　あの…雪音が何か失礼な事を…？」

「いえ、娘さんは何も悪くありませんわ。問題は親の方にあります」

「え…？」

「噂で聞いたんですが、おたくの娘さんの母親は蒸発してるそうじゃないですか。しかも元はホステス。
おまけにあなたもこの町に越して来る前の過去は周囲にまったく話さないって言うし。
私だって本当は娘の友達を減らす様な事はしたくないんですけど、今度、私の創った会社のパーティーで娘を紹介する事になったんです。
世間の目もありますし、娘にもそろそろ付き合う友達を選ばせないとなりません。
まあ、おたくの娘さんはホステスの子だけあって口がうまいし、姫子一人と離れたってお友達が多いから大丈夫ですよ。
私が言いたいのはそれだけです。
ああ。それとこれ、手切れ金。受け取ってください」

姫子の母親はハンドバッグから封筒に入った札束を取り出して、円卓の上に置いた。

「そんな…！　そんなの、いただけません…！」

「ホホホ。遠慮しなくていいんですよ。短い間でしたけど姫子と遊んでいただいたお礼も含めてますから。
これだけあれば、娘さんにブランド服の一着や二着買ってあげられるでしょう。いつもあんな安物じゃ可哀相ですわ」

まさに言いたい放題。

信治に反論する隙も与えないまま母親は帰ってしまった。

信治は何も言い返せなかった自分が悔しかった。

なぜ札束を突き返す事ができなかったのか。

残された札束を、震える手で取った。

（これだけの大金…自分だったら稼ぐのに何ヶ月かかる？　これだけあれば借金も返せる…雪音にだって欲しい物を何でも買ってやれて…いや、何を言っている！　こんな金、早く返そう！　だけど借金がまだ…）

目を固くつぶって悩んだ末、カッと目を見開き、札束を戸棚の引き出しに入れてバン！　と、勢いよく閉めた。

「ハア…ハア…」

（ダメだ…金を見てると気がおかしくなる…落ち着いてから返そう）

その時、雪音が学校から帰ってきた。

「ただいまぁ。ねぇ、聞いて！　今日は図書室でかわいいしおりをもらって…パパ？」

床にへたりこんでいた父親を見て、雪音はキョトンとした。

「…どうしたの、パパ？　具合悪いの？　顔がまっさおだよ？」

「あ…ああ。なんでもないよ。お帰り、雪音」

「そう…ならいいけど。あのね、しおりをもらったの。それでおまじないするんだ。これで私、姫子ちゃんと一生友達でいられるの！」

「……！」

「どんなおまじないかっていうとね…きゃっ！　パパ…？」

信治は雪音を抱きしめた。

（雪音は…！　雪音は普通の女の子なのに！　俺や妻のせいで！）

「ごめんな…！　ごめんな、雪音…！　情けないパパでごめんな…！」

「パパ…何言ってるの？　パパは情けなくないよ。大きな木の板も運べる力持ちだもん」

「雪音…！」

〜〜〜〜〜

「結局…雪音には何も言えませんでした。姫子ちゃんと絶交しろだなんて…言えるわけがない。姫子ちゃんのお母さんが来た事も、金の事も、私の秘密なんです」

白沢はカルピスをグイッと飲んだ。

「…お嬢様の言っていたというおまじないをお聞きになりましたか？」

ずっと黙って聞いていたマスターが、開口一番こう言った。

「いえ。私の元気がない事をさとったらしく、雪音はその後は余計なおしゃべりをしなくなりました。妙なところで気を利かせる子で…」

「そうですか。ところで、失礼ですが、お嬢様はどちらの学校の生徒でしょうか？」

「花風江（かふえ）小学校です」

「…花風江小学校でおまじないといえば、こんなおまじないが有名です。

図書室の本を１０冊借りた生徒に記念品としてしおりが贈られますが、そのしおりには校章にも使われている日々草（にちにちそう）という花のイラストが印刷されています。

日々草の花言葉は『生涯の友情』。それにちなんで、昔の誰かが広めたおまじないです。

そのしおりに日の出の光を当てながら友達の名前を3回唱えると、その友達と一生友達でいられるというものです。

迷信ではありますが、広めた人間はきっと生徒達に友達を大事にし

てほしいと願ったのでしょうね」

そこまで聞いて、白沢はハッとした。

昨日と今朝の記憶が不思議と鮮明に蘇る。

（雪音のやろうとしていたおまじないが、マスターの言ったものだとしたら…

まず雪音は日の出前に目覚まし時計をセットして起きる。

おまじないをしようにもベランダは危険だからまずは外へ出ようとする。だけどドアチェーンがまだ開けられないから、俺を起こそうとする。

覚えてないけど、きっと俺は起こされても起きられなかったんだ。

だから雪音は俺に内緒で南向きのベランダに出て、左側にある東の棟の陰からかろうじて見えた太陽の光にしおりを当てようとして、冊をよじ登って…！

いや、発見された時雪音は何も持ってなかったし、周りにも何もなかったらしいし…）

「そういえば」

マスターの声に白沢は思考の世界から現実に戻った。

「今日の早朝の風は、西から吹いていたそうですよ」

「！　そうか、わかった！　雪音はおまじないをやろうとしてベランダに出た！　その時にしおりが風で飛ばされて、それを取り戻そうとして手を伸ばして…ああ！」

白沢はすぐに喫茶店を飛び出して行った。

「…大丈夫です。明日にはすべてうまくいきますよ」

マスターは微笑み、グラスを片付けた。

――――――

夜もとっぷり暮れ、白沢は団地の並ぶ中を駆け回った。

「どこかに…どこかにあるはずだ…しおりが！」

自宅の棟から東側を探す。

そして…

「…あった！」

淡い日々草の水彩画が印刷されたしおり。裏には花風江小学校の校章。間違いない。

（ごめんな…起きられなくてごめん）

――――――

翌日、日曜日。

信治は雪音のいる病室に入った。

雪音は未だに目覚める事なく、彼女と繋がっている心電図の規則的な音が鳴り続ける。

信治はベッド脇の椅子に腰かけ、雪音の手にしおりを持たせた。

「雪音…これ、落としたんだろ。ちゃんと見つかったよ…」

その時だった。

雪音のまぶたが震えた。

「雪音…？」

だが、震えたのは一瞬のみで、まぶたが開く事はなかった。

そこへ、病室のドアがノックされ、老夫婦が入ってきた。

その二人の顔を見て信治は目を見開いた。

「！　親父…！　母さんまで…！」

「久しぶりだな。信治」

「なんで…ここに？いや、それより俺、勘当受けて…この町にいるなんて言った覚えもないのに」

信治の父親の正幸（まさゆき）はフッと笑った。

「お前の居場所などとっくに突き止めていたよ。
雪音という娘ができた事も知っていた。
だが、お前は結局、こんな事になっても私を頼ろうとしなかったな」

「……父さん…ごめん。俺、一人で生きて子供もできて、もう自分は一人前だと思い込んでた。でも、それは違った。雪音が事故に遭ったのは俺の責任だ」

「そうか」

正幸はそれだけ言って、深く追求する事はない。

それが信治にはありがたかった。

「自分が未熟だとわかったならいい。どうだ、信治。もう一度、帰ってくる気はないか？　雪音の医療費は全額払ってやるし、借金があるというならそれも返してやる」

「帰っていらっしゃい。雪音も連れて。お兄さんの子も大きくなっちゃったし、また孫を育てるのを楽しみたいの」

「ありがとう、父さん、母さん。でも、断るよ」

信治は晴れやかな顔で言った。

「自分の借金は自分で返す。医療費は…本当に足りなくなった時にその分だけ頼む。それに…」

「それに？」

「雪音は、今の学校にいさせてやりたい。友達といるのが、雪音の幸せだから」

「フン…バカ息子が」

「あら。なんだかんだで我が子の幸せを優先させるところはあなたにそっくりじゃないですか。
いいわ、信治。そのかわり、時々は二人で遊びに来てね」

信治はうなずいた。

「パパ…」

突然雪音の声がして、三人はハッと雪音を見た。

雪音はいつの間にか目を開けて、微笑んでいた。

「姫子ちゃんに…会いたい…」

「わかってる。その前に、お医者さんを呼んでくるから、待ってろ」

「まあ…よかったわ！　お父さん！　すぐに先生を」

「先生！　孫が…雪音が気がつきました！」

検査の結果、雪音は後遺症もなく、不思議なくらい順調に回復していた。

ほとんど信治の推理通り、雪音はベランダから落ちてしまったと話した。

唯一違っていたのは、雪音は信治を『起こせなかった』のではなく『起こさなかった』のだ。

「パパの元気がなかったの思い出したから、寝かせてあげようと思ったの」

「バカ…ベランダに出るのはパパと一緒じゃないとダメだろう…」

それから、もう二度と危ない事はしないと親子で約束を交わした。

――――――

その日の夕方。

魚岸姫子はドレスを着せられ、母親に手を引かれて家を出た。

「ほら、姫子。元気出して。これから楽しいパーティーよ」

「…ママ…雪音ちゃん、だいじょうぶかな…？」

「…大丈夫よ。それよりもパーティーでのマナーは覚えてるわよね。忘れない様にしなさい」

「うん…」

家の前のリムジンに乗ろうとした時だった。

「姫子ちゃん！」

声がした方を向くと、信治だった。

「あ、雪音ちゃんのお父さん！」

「どうも…何の用ですか？　これからパーティーなので急いでるんです」

「姫子ちゃんに聞きたい事があって来ました。姫子ちゃん！　雪音の事、どう思ってる？」

「！　雪音ちゃんは…とっても明るくて優しくて…大好きな私の親友です！」

信治は笑顔でうなずき、母親に向き直った。

「だ、そうです。あの話はなかった事にしましょう。これは返します」

呆然とする母親に信治はリュックから札束の封筒を取り出し、迷いなく突き出した。

「フ、フン！　もう勝手にして下さい！」

母親はそれをひったくる様に取り、ハンドバッグにしまった。

「姫子ちゃん。雪音の意識が戻ったよ。まだ当分は学校もお休みするけど、もう少し元気になったら、お見舞いに来てね」

「ホントですか？　はい、もちろんです！　雪音ちゃんのお父さん、ありがとうございました！」

「うん、またね。じゃあ、失礼します。…あ、そうだ。姫子ちゃんのお母さん」

一度返した踵（きびす）をまた返す信治。

「う…！　まだ何か…？」

「おたくの家、思ったより小さいですね！　うちの実家の方が大きいですよ！　何せうちの親父が白沢財閥の会長ですから！　それじゃ！」

「なっ…！？　あの、ちょっと！」

イタズラを仕掛けて逃げる子供の様に、信治は嬉しそうに走って行った。

ＥＮＤ

第四話　罪の代償（前書き）

本日のお客様は大変物騒なお方でございます。

今、私を撃とうとしているのですから。

第四話　罪の代償

「僕は、彼女を殺す事で完璧な女性にしてあげたんだ」

静江久人(しずえひさと)はマスターにサイレンサー付きの拳銃を向けながら、穏やかな口調で話した。

マスターは両手を上げながら、無表情で久人の話を聞く。

「あなたも美しいけれど、僕にとっては彼女が一番なんだ。けど残念な事に、彼女の口だけは愛せなかった。けたたましい笑い声をあげ、ペチャクチャおしゃべりが止まらない。それが煩(わずら)わしかったよ。だから彼女の家に行って、彼女の口を撃った。写真も撮ったよ」

拳銃を向けたまま、久人は上着の胸ポケットから取り出した写真を見せた。

フローリングの床に顔が血まみれの女が横たわったおぞましい写真だった。

「僕はこの写真をずっと見ていたいんだ。でも警察に捕まれば、これを取り上げられてしまう…だから」

「先程おっしゃられた『人には絶対に見つからない場所』をお求めなのですね」

「その通りだ。僕はそこで永遠に彼女と…早瀬澪(はやせみお)といたいんだ」

「かしこまりました。それではお教えいたします」
マスターは両手を上げたまま、ある場所を教えた。
「ありがとう。そして…さようなら」

パン…！

ドサ…と、マスターの体が後ろに倒れた。
「これで僕達の行き先を知る者は誰もいない…なあ、澪」
拳銃をその場に捨てて、久人は去って行った。

それから少し経つと、撃たれて血まみれになったマスターがむくりと起き上がった。
「大丈夫か？」

奥から出てきたオーナーが顔を出して、顔色一つ変えずにマスターに話しかけた。

「大丈夫ではありません」

マスターは口の中から銃弾を取り出した。

「私の歯が欠けていないか心配です。鏡を見てきます」

「そんなに歯が心配なら、なぜわざわざ弾を歯で挟んで受け止めた？

・・・・・・・・・・・・・・・

君は銃では死なないだろう」

上のフロアに向かうマスターの足が止まり、オーナーに向かって言った。

「あの方に死んだ様に見せかけないと、後が面倒でしょう？」

マスターはカウンターの奥のドアの向こうに消えた。

オーナーは床に広がる赤い液体を見下ろし、ふうとため息をついた。

「トマトジュースを再入荷しなきゃな…掃除するのも大変だ。

それから、この拳銃もどうにかしないとな」

銃をハンカチで包んで拾い上げ、オーナーは店の奥に消えた。

――――――

翌日、オーナーが表のマスターとして喫茶店を営業していた時、情報屋のマスターは部屋で新聞を読んでいた。

そこには有暮市(あるぐれし)に住んでいた人気モデルの早瀬澪が、自宅で銃で撃たれて死亡した事件が載っていた。

犯人も凶器の銃も見つかっていない為、今頃有暮市は騒然となっているだろう。

マスターはそれを他人事の様に思いながら、ふと、数年前に喫茶店を訪れた早瀬澪――本名は新出(にいでれい)伶――を思い出した。

――――――

数年前――――

上着のフードを目深(まぶか)にかぶった伶は、モグリの整形外科医を紹介してほしいとマスターに言った。

「お仕事のご依頼をされる場合はご料金が発生いたしますが、それでもよろしいですか？」

マスターが聞くと伶は頷いた。

「それでは、まずは当店のシステムとして、お客様の『報酬』を先にお支払いいただきます」

サービスで紅茶をもらった伶は、ぽつりぽつりと話し始めた。

「一ヶ月前に、私の家が火事で焼けて、両親が亡くなりました。原因はお父さんのタバコの不始末って事になったんですけど…本当はあれ、やったの私なんです」

当時は醜(みにく)い顔だった伶はニヤリと笑った。

「私…こんな顔に生まれたせいで、いじめられてばかりいたんです…だから整形したいって何度も両親にお願いしました。

でも、両親は私が似てないせいかそっけなかったし、いじめにあってるって正直に話したら、学校をやめさせられて自宅学習させられました。

本当は両親も私を人に見せたくなかったようです。

だから私…どうしても顔を変えたくて保険金が欲しくてやったんです」

伶の瞳には両親を殺した罪悪感のカケラもなかった。

代わりにあったのは強い意思。

「こんな事聞いたら、私を悪魔みたいだと思いますよね。
でもいいんです。
今まで私を嘲り笑った周りを見返す為なら、悪魔にだってなりますよ。
誰もが平伏(ひれふ)す最高の美女になるんです…」

「かしこまりました。それでは、腕利きの方をご紹介いたしましょう。
ただし、万が一手術が失敗した場合の保証はいたしかねます。ご了承ください」

「はい」

マスターの出した料金の見積もりにも平然と答える伶。
マスターはそこまで聞くと、引き出しからメモ帳と万年筆を取り出し、何かを書き込む。
そしてメモを切り取って伶に手渡した。

「え…これは？」

「合言葉の様なものです。それを有暮駅(あるぐれえき)近くの狩谷クリニックの院長にお見せ下さい」

伶は半信半疑で狩谷クリニックの前まで来た。

狩谷クリニックにあるのは内科と小児科と産婦人科であって、整形外科はないはずだ。

（まあ…モグリだから整形外科を名乗ってるわけないか）

そう思う事にして中に入り、受付の女性に話しかけた。

「これ、院長さんに…」

受付の女性が伶の差し出したメモを受け取り、少々お待ち下さいと席を立った。

数分して戻ってきたその人は、伶に耳打ちした。

「今夜8時に裏口から来てくださいとの事です。ノックを3回お願いします」

伶が言われた通りにその時間に行き、ノックをすると、中から昼間の受付の人が出た。

「お待ちしておりました。ご案内します」

通されたのは地下に作られた診察室だった。

誰もいないそこに伶が首をかしげていると、受付の女性が医者の椅子に座って長い脚を組んでこう言った。

「ようこそ、いらっしゃいました。私が当クリニックの院長にして闇の整形外科医の狩谷です」

「え、あ…あなたが？」

「はい。私は、密かに人生をやり直したいと願う人のために、裏の仕事をしています。
あなたもさぞ、苦労されたのでしょう。私も昔は醜かった故に苦労した一人です」

「…！　はい、そうなんです！　みじめな過去なんて全部捨てたいです！」

「わかりました。あなたに美と共に幸運が来ますように――――」

――――――

数年後――現在から半年ほど前。

美を手に入れた新出伶は早瀬澪と名乗り、モデル界にすい星のごとく現れた。

その素性も経歴も一切不明。

そんな澪のミステリアスでどことなく危険な雰囲気をかもしだす色

香が、世間を魅了した。

モデルやアイドルの登竜門とされるミスコンテストの優勝をかっさらい、写真集は売上トップクラス。

ファッションショーで彼女の着た服は必ずと言っていい程発売後に即完売。

あちこちの会社からイメージキャラクターになってほしいとひっぱりだこ。

しかし澪は、ここまでのし上がる為に手段を選ばなかった。

美しくなる為に両親の命さえ奪った彼女だ。

卑劣な手口でライバルとなるモデル達を蹴落としたり、自殺に追いやったりする事も厭(いと)わない。

多くのパトロンを作り、親衛隊を侍(はべ)らせ、女王のごとくトップモデルへの道を突き進んだ。

かつていじめられる側だった彼女は、いつしかいじめる側の優越感に酔い始め、気に入らない者や敵となる者を容赦なく罵倒(ばとう)した。

その一方で、仕事で出逢ったカメラマンの静江久人に恋をした。

金とコネで久人を自分専属のカメラマンに雇い、何かと理由をつけて家に招き入れた。

久人も澪の美しさに惹(ひ)かれてはいたが……

―――――

パン！

久人に撃たれ、倒れる瞬間の澪の目が『どうして？』と問い掛けている様だった。

「君の声だけが気に入らなかったからだよ。特に誰かの悪口を言ってる時の嘲笑なんて聞き苦しい事この上ない…」

目を見開いたままの澪のまぶたを閉じさせ、ポラロイドカメラで撮影した。

「やっぱり君は、黙って写真の中にいるのが一番美しいよ、澪」

―――――

そして昨日の明け方――――

夜行列車を使い、マスターから聞いたとある山中に、久人は来ていた。

久人の目の前には、グルル…と唸る巨大な熊が迫っている。

「はは…参ったな…確かに『人には絶対見つからない場所』とは言ったけど…熊がいるなんて聞いてないよ」

久人は諦めた様に空を見上げた。

「まあいいか…澪と同じ色に染まれるなら」

次の瞬間、赤が散った。

――――――

マスターがふと時計を見ると、午後3時のティータイムだった。

私物で買った紅茶の缶を取り出そうと椅子から立ち上がる。

その時、トントンとノックが聞こえた。
ドアを開けると、狩谷だった。
「これはこれは、狩谷様」
マスターは狩谷を迎え入れ、お茶を二人分用意した。
「いただきまーす。……あー、美味しい。マスターの紅茶はサイコーだわ」
「ありがとうございます。ところで、狩谷様。今日は何のご用でしょう？」
「あ、そうだ」
カップを受け皿に置いて、狩谷は真面目な顔で言った。
「私…裏の仕事やめようと思ってるの。今通院中の患者を最後にね」
「そうですか」
「そうですかって…それだけ？」
「はい」
マスターはニコリと笑って返事をし、自らの紅茶を飲んだ。
狩谷は大げさにため息をついてみせた。

「ハァ〜〜…やっぱり全部お見通しなのね、マスターちゃんは。
ハイハイ、理由を言いますよ。早瀬澪よ。あの殺されたモデル。
あの子、私の裏の患者だったの。どっかの誰かさんに聞いてうちを訪ねてきたみたいだったけど、とにかく可哀相な子でね。だから助けてあげたの。
でもせっかくあの子に似合う最高の美貌をあげたのに、あんな事になるなんて」

「それはお気の毒に」

「でも、よくない噂も聞いてたし…敵も多かったなら自業自得かもしれないけどさ、私も責任感じちゃうのよ。思い返せば、私の裏稼業で幸せになれた人って少ないのよね…」

「裏稼業に関わる時点で何かが終わってる様なものですから」

「よく言うわよ。同じ穴のムジナのくせに」

再び紅茶を飲む。

「あ、そういえばさ」

「なんでしょうか？」

狩谷は周りを見回してから、マスターを見て聞いた。

「あの鏡どうしたの？」

マスターの眉がピクッと動いた。

「前に来た時あったわよね。とっても素敵な細かい装飾の鏡。白雪姫に出てくる魔法の鏡みたいな…」

「売り払いました」

マスターはキッパリと言い放つ。

「そう…また見たかったのに残念」

狩谷は苦笑した。

「でも魔法の鏡って、もし実際にあったら便利よね。問い掛ければ何でも真実を答えてくれるもの」

「その真実のせいで白雪姫の継母は破滅の道を辿ったのです。そんなもの、欲しくはありません」

「マスターちゃん…？」

明らかに不機嫌な態度を取るマスターに、狩谷はキョトンとした。

「……まあ、それもそうね。紅茶、ごちそうさま」

空になったカップをテーブルに置き、席を立った。

「私は裏稼業をやめるって話をしに来たけど…ここへはまた遊びに

来てもいい？」

「お店の方でしたら歓迎しますよ。オーナーが」

それはつまり、情報屋とも縁を切れという意味を示す。

それを察した狩谷は少し淋しそうに微笑んだ。

「……そう。じゃあ、さようなら」

「さようなら。狩谷様」

パタンと閉まるドア。

マスターは紅茶を飲み干すと、奥の戸棚に手をかけた。

両開きの扉を開けると、美しい装飾が施された楕円形の鏡があった。

「…結局、新出伶もかつての私の主（あるじ）と似た道を辿りましたね…」

マスターは鏡に手を添え、そうつぶやいた。

ＥＮＤ

第五話　マスターの休日（前書き）

情報屋は本日休業いたします。

私にも、外出する楽しみがございます故。

第五話　マスターの休日

一人の女子高生が、本日定休日のシークレットのドアノブに手をかける。

ガチャ…ガチャ、ガチャ。

ドアは押しても引いても開かない。

そのまま彼女は階段を下りた。

下には二人の同級生が待っていた。

「どうだった？」

「ダメー。やっぱあの噂はガセだったみたい。鍵ちゃんと掛かってたよ」

「そっか」

「まあ、情報屋ってのが本当にいるかどうか暇つぶしで確かめたかっただけだし、嘘だとわかっただけでいいじゃん」

「私は好きな芸能人の情報聞きたかったんだけどなー」

「まあまあ。気分転換にカラオケでも行こ」

「うん。行く行くー」

三人の女子高生は去って行った。

――――――

さて、その噂の情報屋であるマスターはといえば、遊園地に来ていた。

大勢の人がにぎわうアトラクションやステージショーからは離れた、ローズガーデンのベンチに座っていた。

西洋風のレンガ造りの屋敷をモデルにした博物館と、その前に広がる色とりどりのバラの庭園は、園内の中でもデートスポットや散歩コースとして人気がある。

普段はあまり外出しないマスターも、この場所が気に入って時折来ていた。

こうしてベンチから眺める庭園と屋敷の光景は、昔を思い出させるからだ。

はるか遠い昔。彼女が仕えていた主の事を――――

「あの…こんにちは」

不意に声をかけられて、マスターはゆっくり声の聞こえた方を見た。

二十代前半くらいの気弱そうな男だった。

「こんにちは」

マスターは微笑み、挨拶する。

「あの…僕、中森勝（なかもりまさる）と言います…お姉さんは…？」

「…モモ。モモとお呼びください」

マスターは視界の端に見えたバラの色を見て適当に名乗った。

「あの…モモさん。お一人…ですか？」

「はい」

「もし、よろしかったら…今日一日だけでいいので…お…お付き合い、してもらえませんか…？」

後半はほとんど声が小さいが、マスターは聞こえた。

「後ろの方々に言われたのですね。ナンパしてこいと」

「！」

ビクッとした勝の向こう側。離れた所にいる二組の男女…合わせて四人がニヤニヤしながらこちらを見ていた。

「…すみません。本当は男三人で旅行に来るつもりだったんですが…あの二人が勝手に彼女を連れて来てしまったんです。でも僕だけ

彼女いないから…『誰でもいいからひっかけて来いよ』って言われて…。ごめんなさい」

「事情はわかりました」

マスターはスックと立ち上がり、両手でスカートを少し広げて、片足のつま先を地につけた。

「一日だけ…よろしくお願いします。勝様」

「え？　さ、様って…あ、あの、モモさん！？」

勝の手を取り、向こうで唖然（あぜん）とする四人を尻目に、その反対側へマスターは歩き出した。

「う、嘘だろぉ！？　勝の奴、ナンパ成功しやがった！　パシリのくせに！」

「チッ…もうほっとけよ、あんな奴。どうせ遊ばれて泣いて帰って来んのがオチだろ」

「ねー、タッ君。アタシお腹すいたー」

「アタシもー。アイツがフラれるとこ見たかったのにつまんないしー。クレープ食べに行こーよー」

「そうだな」

四人は勝そっちのけで売店に向かった。

―――――

「ま、待ってくださいよ…あの、どこへ行くんですか？」

「無論、あの方達のいない所ですよ」

マスターが立ち止まったのは、遊園地の中央広場だった。

案内板の前で勝の手を離し、向き直って言った。

「さあ、ここからはあなたの自由です。行きたい場所をお選びください。どこへでもお供いたします」

勝は言葉を失った。

（選んでいいって急に言われても…）

いつも誰かに命令されてばかりいた。

自由になりたいと思った事もある。

だが、いざ自由になってみれば、喜びより戸惑いの方が大きかった。

マスターは黙って微笑んだまま、勝を見つめている。

どこへ行くのかワクワクしているかの様に。

このまま勝が行き先を決めるのを待ってくれているのだ。

これまで会った人間の中で、こんな人は初めてだった。

（こんな綺麗な人とデートできるなんて経験…この先ずっとないだろうな…）

置いてきたあの四人も追って来る気配すらなかった。

勝は案内板をしばらく見て、その脇の棚にあるパンフレットを手に取った。

それからやっと口を開いた。

「モモさん…」

「はい」

「メ、メリーゴーランド…でいいですか？」

「いいですね。行きましょう」

メリーゴーランドの馬車に二人で乗った。

軽やかなクラシック音楽が流れ、マスターはそのメロディーを口ずさむ。

遠くを見る様なマスターの横顔に、勝は見とれてしまった。

「さあ、次はどこに行きますか？」

「え…あ、えっと…」

アトラクションを一つ終える度に、マスターは勝に問いかける。

その度に勝は段々慣れてきて、答えるのが早くなってきた。

「よし。次は、サイクリングに行きましょう」

「はい、勝様」

サイクリングコースには様々な形の自転車があり、二人でこぐタイプの自転車に乗って森の中を走る。

「楽しいですか？」

「はい。風が気持ちいいです」

「よかった。あはは…」

「ふふふ…」

「ご利用ありがとうございましたー」

係員に見送られ、二人で次のアトラクションに向かう。
「次はどこへ行きましょうか？」
「モモさん、ホラーハウスって苦手ですか？」
「どうでしょう？　あまり入った事がないので…勝様は？」
「僕は平気です」
「意外ですね。絶叫するアトラクションは避けていたのに」
「ジェットコースターとかは苦手ですよ。でも、オバケなんているわけないし。それに…」
勝の表情が、不意に曇り、小さくつぶやいた。
「生きてる人間の方が、怖いですから…」
「勝様？」
「あ、なんでもないです。行きましょう」
ホラーハウスは少人数で順番に入る為、入場制限があって少し行列ができていた。
そこに行こうとした時、勝の足が止まった。
行列の中に、勝と一緒にいたあの四人が並んでいたのだ。

こちら側にも聞こえる程の大声でしゃべり、笑っていた。すぐ近くに並んでいる客は迷惑そうにしている。

「でさー、そん時の勝のポカンとした顔ときたらよー！　笑っちまったぜ！」

「キャハハハ！　ダッサーい！」

「で、俺は言ってやったんだよ！　『俺達友達だろ？』ってさ！　そしたらアイツ、ＡＶ持ってレジに行きやがった！」

「しかもその時の店員、女だったんだぜ！」

「最悪〜！　勝君カワイソ〜！　キャハハハ！」

「それで？　まさかタッ君達も観たんじゃないでしょーね！」

「観ねーよ！　『やっぱいらね。彼女いるから』って言ったよ！」

「キャハハハ！」

勝はそれを聞いて恥ずかしそうに俯いた。

手の平に爪が食い込む程握りしめる。

ふと、その拳をマスターが優しく握った。

勝がハッと顔を上げると、マスターは優しい笑顔をして言った。

「一つだけ、わがままを言わせてください。観覧車に乗りたいです」

「モモさん…」

勝は泣きそうになりながらも、頷いた。

――――――

二人を乗せた観覧車のゴンドラが、ゆっくりと上がって行く。

「…あの二人の男は、僕の大学の同級生なんです」

勝は話し始めた。

「あの二人と会ったのは大学に入ってからだったんですが…それまでにも、僕は常に誰かの言いなりでした。『友達だろ』って言われると断れないんです。

小学生の頃、友達の頼みを一度断った事があって、それ以来クラスで孤立してしまった経験があるからです」

「そうだったんですか…でも、それって、友達ではないですよね」

「わかっています。でも…僕はもう孤立するのが嫌だから…」

「本当に、幸せなのですか？　あの方達といて」

「……幸せなはず、ないですよ…でももうすぐ卒業ですし、それまでの辛抱だと思えば…」

「勝様」

俯いていた勝は、マスターを見据えてニコッと笑った。

「モモさん。今日一日だけ、こんな僕に付き合ってくれてありがとうございました。観覧車を下りたら、ホテルに帰ります」

「…そうですか。こちらこそ、楽しいひと時をありがとうございました。最後に一つ、質問させていただいてもよろしいですか？」

「はい。何ですか？」

「勝様は、最初にこうおっしゃいましたね。『誰でもいいからひっかけて来いと言われた』と。そうすると、勝様ご自身が私を選んだという事になります」

「はい」

「なぜ、私を選んだのですか？」

「え…なぜって…えっと…」

勝はちょっと戸惑ってから、正直に答えた。

「…気を悪くしないで聞いてください。

僕はナンパを強要されて、絶対に失敗すると思ってました。だから、どうせ失敗するなら思い切って美人を選ぼう。そうすれば失敗しても納得できる。

半ばヤケクソにそう思ってたんです。

その時にモモさんを見かけて…」

「偶然声をかけたのですね」

「はい…。僕からも質問いいですか？」

マスターははいと頷いた。

「モモさんはどうして僕の誘いに乗ってくれたんですか？」

「…あなたが昔の私に似ていたから…」

「え…？」

「と、いう理由だったらどうします？」

クスクス笑うマスターに、勝はからわかわれてるのかなと思った。

「あ、あはは…まさかそんな…。モモさんは僕とは違うでしょ？

モモさんは…人に仕えると言うより仕えられる側だと思いますよ。

僕だったら、モモさんの言いなりにだったら喜んでなりたいなー…

女王に仕える召使（めしつかい）みたいに…」

「え…？」

「あ、もちろん例えですよ。

でも、もしモモさんが女王のドレスを着たら、あのローズガーデンにもっと似合ってるでしょうね…って、何言ってるんでしょうね、僕！」

アハハ…すみませんと笑ってごまかす勝を見て、マスターは苦笑いして言った。

「私のような者にはもったいないお言葉です。

むしろバラが似合うのは、私の最初に仕えた主…」

「え…？　仕えた主って…

モモさんって、どこかの家政婦さんなんですか？

それでそんな敬語なんですね」

「まあ、そんなところです」

「…すごいですね」

勝はうらやましそうに言った。

「僕なんて孤立が嫌で人に仕えてるだけなのに、モモさんは立派なお仕事で人に仕えてるんですよね」

「すごくはありません。私では、結局あの方を幸せにできなかったのですから…」

「……？」

「すみません。昔の話です。忘れてください」

「あ、はい…」

気にはなったものの、聞いてはならない気がしたので、勝は詳しく聞かなかった。

そうして話しているうちに、ゴンドラは下がり始めていた。

「あれ…？　なんだろ？」

何気（なにげ）に外の景色を見ていた勝が正門の方を見てつぶやいた。

なぜかそこから救急車が園内に入って来たのだ。

「ホラーハウスで何かあった様ですね。ほら、中にいた客やスタッフが続々と外に出ています」

――――――

観覧車を下りたマスターと勝は、ホラーハウスへ急いだ。

野次馬をかきわけて行くと、ちょうど救急車がホラーハウスの前に到着し、救急隊員が担架でケガ人を運んでいた。

そのケガ人は…

「た、田淵(たぶち)君!?　牧原君!?」

勝の同級生達とその彼女達だった。

呆然(ぼうぜん)と　救急車を見送った勝に、マスターが話しかけた。

「そこで聞いて来ました。あの方達、酸欠で倒れた様ですね」

「酸欠?」

「このホラーハウスでは、一時お客様を密室に閉じ込めて、怨霊の呪いを演出する仕掛けがあるそうです。

それに使われるドライアイスの気体が、機械の故障で通常よりも多く出てしまい、加えて密室もすぐに解除する事ができなくて、中にいたあの四人は倒れた様ですね」

「……」

勝はしばらく黙ってホラーハウスを見上げた。

看板にはホラーハウスの名前が刻まれている。

――REVENGE　OF　SERVANT

（召使（めしつかい）の復讐…か）

『主に理不尽な扱いを受けた末に無念の死を遂げた召使の怨念が宿る館――あなたは無事に出られるか』

確かパンフレットにはそうあった。

「モモさん…呪いなんてあるわけ…ないですよね」

「それはその人のとらえ方によると思います。

たとえば善良な人が事故に遭（あ）えば単なる不運と思われますが、悪さをした人が事故に遭うと罰が当たったと思われるでしょう？」

「そうですよね…こんなの…ただの作られた設定ですものね」

勝は俯いて、また考え事をした。

（確かに…あいつらが痛い目見ればいいのにって、思った事はある。でも…やっぱりこんなの、違うよな）

「モモさん」

顔を上げてマスターを呼ぶ。

「はい」

「僕なんかでも…変われると思いますか？」

「もう変われていますよ」

マスターはニッコリと笑った。

「だって、あなたはもう自らの行き先を決められるでしょう？」

「！　ありがとうございます。それじゃ…病院に行ってきます！」

「救急車の行き先は、笹川病院だそうですよ。第二ゲートにタクシー乗り場があります」

「ありがとうございます。さようなら、モモさん」

「さようなら、勝様」

走って行く勝を見送り、マスターは思った。

（やはりわかりませんね…人間の心だけは）

夕暮れの中、マスターはゆっくりと帰路に着いた。

ＥＮＤ

第六話　聖夜の火遊び（前書き）

火遊びなんて危険なだけ。

それを覚悟の上ならば、極上の遊び相手をご紹介いたします。

第六話　聖夜の火遊び

恋をする人間にとって最大の難関と言えば想い人に気持ちを伝えるいわば告白であろう。

高校生になって初めて恋をした有川沙由美は、その日、勇気を出して同級生の男子に告白した。

「僕でよければ…いいよ」

こうして二人の交際は始まった。

ところが彼はマザコンだった。何かと母親の話ばかりした。

半年後には彼の母親が沙由美の家まで来て怒鳴り込んで来た。

『あんたみたいな子がたぶらかすからうちの子の成績が落ちたのよ！！　どうしてくれんの！！』

結局沙由美は彼と別れた。

こんな母親と関わりたくないと思ったからだ。

彼も引き止める事なく、『ごめん…』の一言で終わった。

次に恋をしたのは大学生の時。

相手から声をかけられ、話をするうちに打ち解けて、交際する様に

なった。

この時に初体験も済み、沙由美は本気で彼との結婚を考えていた。

そして大学を卒業し、互いに社会人としてスタートを切ろうとしていた矢先の事だった。

突然知らない女から、電話がかかって来た。

『あの人と別れてくんない？　私、あの人と高校の時から付き合ってんのよ』

彼を問い詰めて、それが真実である事がわかった。

『チッ…ああ、そうだよ。俺は二股かけてましたー。そろそろお前にも飽きた頃だし、これでバイバイだな』

彼は開き直って去って行った。

沙由美は悲しみよりも怒りの方が強かった。あの男よりもずっとイイ男を見つけてやると意気込んだ。

そして次に、お見合いパーティーで新しい男と知り合った。

容姿も学歴も収入も文句なし。結婚願望もある。

沙由美はその男と付き合い始め、一年後に結婚式を迎えた。

ところが式の当日に、男が突然姿を消した。

彼が結婚詐欺師であったと気づいた時には後の祭。結納金も沙由美が彼に預けていた貯金もすべて持ち逃げされてしまった。

沙由美は警察に訴えようとしたが、一族の恥だからよせと親族中から口止めされてしまった。

途方に暮れた沙由美を慰めてくれたのは、式に来ていた高校時代の恩師だった。

彼女が友人の息子として紹介したのが、七丘博明（ななおかひろあき）だった。大学院生で沙由美より一つ年下の、真面目で純朴な好青年だった。

今度は5年以上かけてじっくりと付き合い、互いの事を理解し合った上で結婚した。

彼のくれた婚約指輪は、沙由美の憧れのブランド『ティー・ファミリー』のダイヤの指輪だった。

0．3カラットのその小さな石を見て、彼はこう言った。

『今はこれが精一杯だけど、いつかきっと…このダイヤよりすごいダイヤをプレゼントしてみせるからね』

『ええ、待ってるわ。未来の博士さん』

〜〜〜〜〜〜

「…と、まあ、こうして私はなんとかゴールインできたんだけどね

え」

七丘沙由美はマスターに過去の秘密…すなわち男運のなさを打ち明けて、コーヒーを飲んだ。

マスターは両手を前で軽く組んだ姿勢のまま、彼女の話を聞いている。

「真面目すぎて…性に対して淡白(たんぱく)っていうの？　私のボディより顕微鏡で何か観る方が好きみたいでさ、最近は研究もいいように進んでるみたいで、海外の偉い人の講演会聞いて回ってるのよ。

だから…『ご無沙汰』ってわけ」

マスターはうんうんと頷いた。

「仕事熱心な旦那様を持つと、大抵はそうなるものです」

「去年のクリスマスも一緒に過ごそうって約束したのに、急になんとかプロジェクトの実験に成功したとかで電話がかかってきてさ…イブから大学に泊まり込み。で、今年こそって思ってたら、今度はアメリカの学会に行っちゃった。少なくとも日本に帰って来るのは27日になるって…冗談じゃないっつーの」

「大変ですね。でも、そうしたお仕事もご存知の上で、旦那様とご結婚なされたのでは？」

「あの時は今ほど忙しくなるとは思ってなかったのよぉ。どんだけ大事な研究か知りませんけどね、どうせなら私の気持ちも研究しろっての！」

「！　……人の気持ち程、研究しにくいものもないと思いますよ…」

「え？」

そうつぶやくマスターの表情に陰りが見え、沙由美はキョトンとする。

「いえ…なんでもありません。それで、どの様な『蜜』をご希望でしょうか？　まだ聞いておりません」

マスターはまた優しい笑みを浮かべて質問した。

「ああ、そうだったわね」

沙由美はコーヒーを飲み干してから言った。

「最高の男を紹介して」

「最高の男…でございますか？」

「そ。クリスマスイブの一晩だけ、私の王子様になってくれる男。結婚5年目にして、初めての浮気をしてやるの。

で、アイツが帰って来たらさ、さりげなく『素敵な人に出逢ったの』とか言って、その人のよさを自慢するの。

それでアイツがちょっとでもヤキモチ妬いてくれたら離婚はなし。もし妬かなかったら離婚。

もうこれに賭けた。

でも私は男運がないから、どうせまた変な男に引っかかるかもしれないわ。

だけどアンタの情報は確実だって噂だから…お願いできる？」

「かしこまりました。それでは、まずはお客様のご希望のタイプをお教え下さい」

「イケメンでデートのエスコートが上手な人なら誰でもいいわ。マスターにお任せするわよ」

「かしこまりました。お客様のご希望に該当する方をご用意いたします。

２０日の夜８時以降に当店にお越しいただければ、ご紹介できると思います」

「１週間後ね。いいわ。それじゃ、よろしくね。コーヒーごちそうさま」

沙由美は帰って行った。

（さて…あの男ならこういうのがお好きでしょうね）

マスターはそう思い、ある所へ電話をかけた。

やがて受話器の向こうから聞こえてきたのは英語だった。
マスターは流暢（りゅうちょう）な英語で、受話器の向こうの相手に話し出した。
和訳するとこうだ。
「ミスター・ロビンソン。シークレットのマスターです。日本のクリスマスイブの日はお一人ですか？　ちょっとした『お遊び』にお付き合いいただきたいのですが」

――――――

約束の日時に沙由美は再び喫茶店を訪れた。
閉店後の喫茶店は薄暗いが、カウンターの所だけ明かりに包まれている。
「いらっしゃいませ。お待ちしておりました」
「こんばんは。それで、連絡はついたの？」
「はい。こちらがその方の写真でございます」
マスターはカウンターの上に１枚の写真を置いた。
そこに写っていたのは、２０代後半くらいの金髪に青い瞳の端正な顔立ちの男だった。

「うわ…なんか、カッコよすぎない？」

まるでハリウッド俳優にいてもおかしくない程の美男子に、沙由美は思わず感嘆の声を上げた。

「最高の男をお望みなさったでしょう？」

「そりゃそうだけど…外国人だなんて聞いてないわよ。英語話せないし…」

「ご心配いりません。この方は日本語を含め5ヵ国語を話せます故」

「ごっ…」

沙由美は唖然とした。

「この方の名前はトニー・ロビンソン。ドバイで宝石商を経営している独身貴族でございます。

24日の午後1時に露瀬（ろぜ）駅前の『愛の翼』像の前で待ち合わせを希望しておりますが、よろしいですか？」

「は、はい…」

（ふ、服選びとかどうしよう…そもそも露瀬なんてセレブの町じゃない…あんまり歩いた事ないわよ…）

――――――

そうこうしているうちに２４日クリスマスイブの日が来た。
露瀬駅の前、待ち合わせ場所として有名な翼をモチーフにしたモニュメント。これが『愛の翼』像である。
その前に、カジュアルスーツを着こなしたトニー・ロビンソンがいた。
「あ、あの…トニーさん、ですか？」
沙由美が話しかけると、彼はハイと答えた。
「私、沙由美です。七丘沙由美…」
「ああ！　あなたが沙由美さんですか！　はじめまして。僕がトニー・ロビンソンです。こんな綺麗な方だとは驚きました」
甘い声に流暢な日本語を乗せ、トニーは輝く様な笑顔で沙由美と握手を交わした。
「一夜限りですが、よろしくお願いしますね」
「は、はい…」
（すごい…写真で見るよりカッコいいー…）

沙由美が驚いたのはそれだけではなかった。ハイヤーつきの白いリムジンに乗せられ、有名ブランドの高級店でショッピング。

トニーはクレジットカードの最高峰ブラックカードを持っており、沙由美が遠慮するのも聞かずに服も靴もバッグもアクセサリーも買ってくれた。

さらにチェックインしたホテルは最高級のホテルと名高い『露瀬シティホテル』。しかも最上階のスイートルーム。

「すごい…この部屋テレビで見た事あるわ…でも、一年くらい前から予約しなきゃダメじゃなかったの？　ましてクリスマスイブになんて余計に…」

広々とした豪華で気品あふれる部屋を見渡しながら歩く沙由美。

「余計な心配はしなくてもいいのです。すべてあなたの為なのですから」

トニーは笑って沙由美を抱きしめた。

「ありがとう…すごく嬉しいですわ…」

その後、部屋に直接運ばれる豪華な料理を堪能した。

――――――

その頃、鵜羽大学の研究室にて、七丘博明は機械を使って何かを削

る作業を行っていた。

「よし…やったぞ！」

完成したそれは、虹色の輝きを放つ新開発の人工ダイヤモンド。

『天然ダイヤモンドを凌ぐダイヤモンドを発明する』という彼の成果が、その2カラットにも満たない美しい石を生み出したのだ。

（本当はもっと大きくしたかったんだけど…イブに間に合わなくなる。アメリカに行くなんて言って、騙してごめんよ、沙由美…）

人工ダイヤを小さな宝石箱に入れて、博明は研究所から出ようとした。

その時、ピリリ、ピリリと博明の携帯電話が鳴った。

（誰だ…？　沙由美じゃないよな。仕事中は電話しないって約束だし…）

ディスプレイの番号は非通知になっている。

博明は通話ボタンを押した。

「はい、七丘です」

『あなたの妻は預かった』

「え…？」

変声機を使った独特の声が、確かにそう言った。

『午前０時までに露瀬シティホテルのスイートルームに来い。私の目的は、あなたの人工ダイヤの製造方法を書いた文書だ。言っておくが、私は銃を持っている。警察には知らせるな』

ブツ…ツー、ツー。

「もしもし！　もしもし！」

博明はリダイヤルしようとしたが、そこで携帯電話のディスプレイの時刻が目についた。

（０時までに露瀬シティホテルだって？　ギリギリじゃないか！　クソ…！）

博明は製造方法の文書を鞄にしまい、駆け出した。

――――――

「警察には知らせるな」

ソファに長い脚を組んで座ったトニーはそう言って、変声機つきの電話を切った。

「その銃って、これの事？」

「！」

振り向いたトニーに銃口が向けられた。
ランジェリー姿の沙由美が、サイドテーブルに置かれていた拳銃を手にしたのだ。
「…てっきりもう寝たと思っていたよ、ミセス七丘」
トニーは両手を上げて無抵抗を示す。
「一夜限りの女にこれだけ貢ぐんだもの。おかしいと思わない方が変だわ。それに私、元々男なんて信じてないもの」
「君の旦那さんもかい？」
「ええ。アイツがアメリカに行くって言ったのも嘘だったのはわかってたわ。
だってアイツ…自分の部屋にパスポート忘れて行くんだもの。マヌケでしょ。
夫の部屋なんて勝手に掃除するもんじゃないわ…」
沙由美は目に涙を溜めながら、話し続ける。
「アイツがそんな研究してた事だって私は知らなかった。私に嘘までついて…。やっぱり結婚なんてしなきゃよかった！　そんなくだらない研究のせいで、私が危険な目にあいそうになってたのよ！」
それはもはや、トニーへの言葉ではなくなっていた。

涙を流して、今までの不満をぶちまける。

「男なんてみんなそう！　誰も私を見てくれやしない！　最初の男はマザコン！　次の男は二股野郎！　三人目が詐欺師で四人目は研究オタク！　そして今度は成金趣味の脅迫男！？　もうたくさんよ！　こんな誰も愛してくれない人生なんて！　――消えちまえ！！」

沙由美は銃口を自らのこめかみに当てて、引き金を引いた。

――――――

２時間後。午後１１時５５分。

露瀬シティホテルに到着した博明は、受付に駆け込んだ。

「す、すみません！　ハァ、ハァ…ス、スイートルームは…どこですか！？　ハァ、ハァ…」

息を切らしながらものすごい剣幕でそう尋ねる博明に、受付嬢が引き気味になりながら聞き返す。

「あの、失礼ですがお名前は…？」

「この先に最上階行きの直通エレベーターがありますよ。その最上階がスイートルームです」

突然現れた金髪の男が、博明にそう教えた。

「そうですか！　ありがとうございます！」

博明は走って行った。

受付嬢が金髪の男に話しかけた。

「ミスター・ロビンソン。よろしいのですか？」

「いいんだ。あの部屋は、あの二人の為に用意したものだからね。じゃあ、僕はもう行くよ」

「ありがとうございました。またのお越しをお待ちしております」

受付嬢も玄関のホテルマン達も、揃ってお辞儀をしてトニーを見送った。

――――――

最上階に着いたエレベーターが開くと、その先にはドアがある。自動ロックになっているそのドアは開け放たれていて、博明はすぐに中に入った。

「沙由美！　沙由美！？」

広い部屋には誰もいない。寝室に入ると、天蓋つきのキングサイズ

のベッドがあった。そこに、無傷の彼女が横たわっていた。

「沙由美！　しっかりしろ！　沙由美！」

「うっ…」

ゆっくりとまぶたが開き、沙由美の意識が戻った。

「…あなた」

「大丈夫か！？」

「私…生きてるの？」

（確か私、銃で自殺したんじゃ…）

記憶を辿る沙由美を、博明は力強く抱きしめた。

「ああ！　生きてるよ！　もう大丈夫だ！　よかった…！　よかった…！」

博明の背中に自然と手を回した時、沙由美はハッとした。

（博明は…私の為に、こんなに体が熱くなるほど必死にここまで来てくれたんだ…）

普段運動はあまりしない博明。

大学からは電車で来たとしても、徒歩も含めてここまで2時間はかかる。トニーが電話を入れたのは、１０時を過ぎた頃だった。

沙由美がそう考えていた時、博明が沙由美の肩を抱いて向き合った。

「沙由美。誘拐犯はどこだ？」

「…わからない。私、パニックになって…犯人の銃で自殺しようとして…それで死んだと思ったの。そうして気がついたら、あなたが…」

「そうだったのか…ごめんよ、僕の研究が狙われたばかりに…さあ、ここを出よう」

沙由美は頷いて、ベッドから下りた。ふと、その時にサイドテーブルの上にメッセージカードが置いてあるのに気づいた。

「何これ…英語？」

博明がそれを見て、内容を理解した。

――メリー・クリスマス
文書はいただきません。ただし、もしあなたが今後彼女を泣かせる様な事があれば、僕が彼女をいただきます。
クリスマスの怪盗より

「なんて書いてあるの？」

「…要求してきた文書はあきらめてやるって。そういった旨が書かれてる。

…沙由美」

「ん、何？」

「嘘ついてごめん。どうしても、あの時の約束を果たしたかったんだ」

そう言って博明は、鞄からあの宝石箱を取り出して、中身を開けて見せる。

「！　キレイ…」

「僕の作った人工ダイヤだ。言っただろう。婚約指輪の小さなダイヤよりもすごいダイヤをプレゼントするって」

「バカ…私が嬉しかったのは、ティー・ファミリーのダイヤよりもあなたからのプロポーズだったのに…」

沙由美はやっと気づいた。

白馬の王子様はずっと側にいた彼であった事に。

「メリー・クリスマス、沙由美」

「メリー・クリスマス、博明」

――――――

喫茶店のマスターの元にトニーは訪れ、銃を向けた。

パァンッと言う音と共に飛び出したのは、弾丸ではなく電子オルゴールの音。

クリスマスと新年を同時に祝う定番ソングのメロディーが流れた。

「さすがおたくのオーナー。こんなオモチャを作るなんていい趣味してるぜ。これ、元は本物だったんだろ？」

「本当の愛を手に入れるのに、物騒な物など必要ありません」

「違いない」

トニーはリボンで飾られた細長い箱を持ってきた。

「極上のロマネコンティだ。ここには酒はないから買ってきた。乾杯といこうぜ」

「いいですね」

マスターがグラスを出して。トニーがワインを開けて注ぐ。

「それでは、苦難を乗り越えて結ばれたご夫婦の愛を祝して」

「乾杯」

END

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3600x/

喫茶店のマスターは情報屋

2011年12月24日00時50分発行